

書評：ジャン・グロンダン(著)、末松壽、佐藤正年(訳)『解釈学』白水社、2018年

岡田勇督

本書は、カナダ・モントリオール大学の哲学教授であるジャン・グロンダンが、フランス語圏において定評のある入門書シリーズ「Que sais-je?」の一冊として書き上げたものの翻訳である。グロンダンは近年、宗教哲学の分野における活動を見せているが、彼の思想の基盤になっているのはドイツとフランスにおける解釈学の伝統に他ならない。その業績はガダマーの伝記なども含めて多岐にわたるものであり¹、グロンダンの存在なくしては現代の哲学的解釈学における研究は成立しないといっても過言ではないほどの重要な研究者である。本書は、この分野における文字通りの第一人者によって書かれた比類ない入門書であるといえるであろう。

本書の章立ては以下のようにになっている(亀甲括弧〔……〕で補われているのは、その章で主に扱われている思想家)。

序論 解釈学とは何であり得るか

第一章 解釈学的の古典的な考え方〔アリストテレス、アウグスティヌス〕

第二章 十九世紀におけるより普遍的な解釈学の出現

〔シュライアマハーとディルタイ〕

第三章 解釈学のハイデガーによる実存論への転回

第四章 解釈学の躍進へのブルトマンの寄与

第五章 ハンス＝ゲオルク・ガダマー——あるいは理解という事件の解釈学

第六章 解釈学とイデオロギー批判〔ハーバーマス〕

第七章 ポール・リクール——解釈の抗争を前にした歴史的自己の解釈学

第八章 解釈学と脱構築〔デリダ〕

第九章 ポスト・モデルヌの解釈学——ローティとヴァッティモ

結論 解釈学の普遍性の諸相

この目次を概観して即座に見てとれるのは、扱われる解釈学の歴史の幅であろう。アリストテレスの『命題論』やキリスト教における聖書解釈学の起点となるアウグスティヌス、そして近代解釈学の発端であるシュライアーマハーを経てディルタイ、さらにハイデガー、ガダマーといういわゆる存在論的転回に至る展開は解釈学の入門書においては馴染みの構成であるが、本文が 150 頁に満たないこの入門書においても基本的な思想家が過不足なくきちんと盛り込まれている。しかし本書の驚くべきところは、そのような分量的な限界をものともせずこの範型における歴史叙述の密度をあげ、最新の入門書にふさわしく近年の思想潮流をも取り入れている点にある。解釈学の入門書において神学者であるブルトマンの貢献がきちんと考慮されていることは、その当然な妥当性にもかかわらず革新的なことであるといえるであろう。また、ガダマーが巻き込まれたハーバーマスとデリダとの論争だけに留まらず、従来は扱われることのなかったリチャード・ローティとジャンニ・ヴァッティモにまで時代を下らせているという点もこの本の大きな特徴である。このような特徴は、グロンダン自身が 30 年近くも前に書いたドイツ語の『哲学的解釈学への入門』や²、おそらく従来日本語で読めた解釈学にかんする唯一の入門書である麻生建の『解釈学』などと比較することによっても明瞭となる³。このようなことを考慮しても、本書は解釈学という日本ではそれほど認知度が高くない分野に対する恰好の入門手段を提供するものであると言えるであろう。

さて、本来であればここで本書の概略を示すべきところであるが、入門書であることから上のもくじでその概要はほぼ明らかになっている。よって、以下では書評としてのコメントを付すことにする。まず内容に関してであるが、第一に本文わずか 150 頁足らずでここまで広い範囲を扱ったことの代償として、全体的に多くの説明不足が生じていることは否めない。他に比べて字数が多い章においても、例えばハイデガーの『存在と時間』における現存在の存在様態としての理解(了解)は十分に説明がなされているだろうか、ガダマーの哲学的解釈学における個々の特徴的な述語(Spiel, Wirkungsgeschichte, Anwendung 等)についての記述は、この本を読んだだけで本当に理解することが可能だろうか。本書の有効な使い方としては、このようなディテールを期待するよりも、解釈学の歴史を大雑把に概観することによって、次に一次文献や専門書を読む際の〈先行理解〉を養うといったところにあるだろう。第二に、ここで紹介される議論には、解釈学における共通見解を超えてグロンダンの哲

学的立場が色濃く反映されている点がいくつか見受けられる。例えば、真理の古典的な定義である「事物と知性の適合 *adaequatio rei et intellectus*」としての〈対応説〉を解釈学においても重視する点は典型的なものである(例 68, 74)⁴。解釈学においては通常、ハイデガーが論じたアレーティアとしての真理が支配的なものと考えられている。テキストを読んでいるさいにその言葉に捉えられ、突如として覆いを取り除かれたようにその理解へと至るというモチーフは、ブルトマンの実存論的解釈、ガダマーにおける理解の出来事というような形で解釈学において具体化されている。しかし、この方向性を極限まで推し進めると、テキストによって読み手が啓発されることこそが重要なのであって、その際の理解の〈正しさ〉が等閑視されてくる、あるいは理解や解釈の〈正しさ〉など測れるものではなく、どんな解釈も正しい「なんでもあり *anything goes*」という相対主義が生じうる。グロンダンはローティやヴァッティモなどポストモダンの解釈学においてこのような方向性が嗅ぎ取られると考え、それに対して、解釈学は理解や解釈の恣意性や相対主義と断固として戦う立場であり、さまざまな意味において真理の対応説がそこに生きているということを強調するのである⁵。グロンダンのこのような実存論的立場はそれ自体説得力のあるものであるが、それを思想的にガダマーに読み込むことができるのかどうか、彼のヴァッティモ解釈はそもそも妥当なのかなどの諸点を含め、解釈学における議論は依然として継続されている。本書はこのような諸々の点を考慮に入れて読む必要があるが、それでも、このような留意点を超えて余りある名著であると言えるであろう。

以上は本書の内容に関するコメントであるが、書評として指摘されなければならないのは何よりもその翻訳であろう。本書を一読したかぎりでも、解釈学の専門的観点から、哲学史一般の観点から、あるいはドイツ語の観点から違和感のある訳がほとんどのページに散見される。しかし、本書の全体にわたる原文と照合しつつの翻訳チェックは時間的にも、本書評の分量からしても無理がある。よって以下ではそのほんの一端として、本書の重要な部分をなすガダマーを扱った第五章(60-80)に範囲を絞り、そのなかでも問題と思われるものの一部を抜粋して指摘する。

- 「事件」(60 他)：本書では *événement* というフランス語の単語に対して一貫して「事件」という訳語が当てられている。たしかにそのような訳は存在するが、すくなくとも解釈学の分野ではこれは「出来事」と訳するのが通例となっている。これはドイツ語の *Geschehen* に対応している。

- 『真実と方法』(60 他) : 本書ではガダマーの主著 *Vérité et méthode (Wahrheit und Methode)*を一貫して『真実と方法』と訳しているが、この著作の邦訳を含め、あらゆる他の解釈学の関連書籍はこれを『真理と方法』と訳している。たしかに、ガダマーがこの著作で論じている精神科学における〈真理〉は一般的な真理概念から少々外れたものを含むものであり、その意味で代わりに「真実」という訳語を試みる動機は理解できる。しかし、ガダマーの真理概念はハイデガーがアレーテイアという思想をもって拡張した真理概念の系譜にその背景を有しており、哲学史におけるその連続性を真剣にとるならば、やはり「真実」ではなく「真理」と訳されなければならないであろう。また、本文中の *vérité* という語に対する訳語の揺れもここで問題にされなければならない。本章の鍵となるこの語が、特殊な文脈の影響も見られないところで、「真実」(62)、「真実性」(62)、「真理性」(63)、「真理〔概念〕」(64)と一貫しない多様性を見せている。
- 「解釈学的円環」「解釈学の円環」(61) : 本書でしばしばこのように訳される *cercle herméneutique* には通常「解釈学的循環」という言葉が使われる。ある先行理解をもって行った理解がまた次の理解の際の先行理解となるというまさに循環性がここで問題となっているのであって、「円環」という訳語ではそのような意味が抜け落ちてしまう。
- 「終わりある」「終結性」など(61 他) : これらの語は *fini* や *finitude* などの訳語として本書に登場するが、これは通常「有限な」や「有限性」と訳される(61 他)。この言葉は、人間がつねに一定の状況に投げ込まれ、一定の観点からしか物事を見ることができず、その理解がつねに媒介され、状況づけられているという解釈学の根本認識を表現する最も重要な概念であり、適切な形で取り扱う必要があるであろう。
- 単純な誤訳(61 他) : 「ハイデガーの考え方は、人文諸学における真理性への主張を正当に評価しようと意図する解釈学にとって由々しい結果をもたらすはずはないのではないか」(61)という一節の原文は *La conception de Heidegger ne doit-elle pas avoir des conséquences pour une herméneutique qui se propose de rendre justice à la prétention de vérité des science humaines?*であり⁶、「ハイデガーの考え方は、人文諸学の真理要求を正当に評価しようとする解釈学にとって重大な帰結をもたらすはずではないだろうか」(重大な帰結をもたらすはずがない、ということが果たしてあるだろうか、いやもたらすはずである)というように、反語で理解するのが正しい訳となる。本書の訳は正反対の意味をとってしまっている。
- 「ユマニズム」(62) : この原語はもちろん *humanisme* であるが、ここで論じられてい

るのはおもにドイツの伝統に根差したガダマーの議論であり、あえてフランス語の訳語を用いるのは少々奇妙な感じを読者に抱かせる。もっともあたりさわりがなく適切なのは、訳注にもある通り「人文主義」ではないだろうか(155)。『真理と方法』の邦訳でも「人文主義」の語が用いられている⁷。

- 「育成(Bildung)」(63)：この語は **formation** の訳語として当てられているが、人文主義との関連では「教養」がより適当な訳語であろう。これも『真理と方法』の邦訳では「教養」の語が用いられている⁸。また興味深いことに『真理と方法』の当該箇所では、「教養」を表わす際にラテン語由来の **Formation** よりも **Bildung** のほうが用いられることになった過程にかんする考察もある。
- 「ゲーム」(64)：フランス語の原文は **jeu**、ガダマーの用いたドイツ語は **Spiel** である。『真理と方法』の第一部である芸術論を導くこのキーワードは、そのドイツ語における概念の広がりを超えて活用して論じられている。「光の戯れとか、波の戯れとか、ボールベアリングの中の部品の遊びとか、四肢の調和した動き (**Zusammenspiel**)、力の運動 (**Spiel der Kräfte**)、蚊の戯れ、そればかりか言葉遊びなど」といったように⁹、戯れ、遊び、演劇 (**Schauspiel**) など、ドイツ語の **Spiel** という言葉は非常に多くの現象をカバーする言葉であり、ガダマーはこれらを包括的に論じているのである。従って、たしかに「ゲーム」もそのなかの一つに含まれるとはいえども、ガダマーの **Spiel** (あるいはグロンダンがここで用いている **jeu**) の訳語としては、「ゲーム」はあまりに特定のものを指しており、適切であるとは言えない。代替案として考えられるのは、ホイジンガなどの伝統に連なる「遊び」(『真理と方法』の邦訳はこれを採用している)、あるいはガダマーの規定「どこで終わるのか目標のはっきりしない、当てどのない往復運動」に近いより抽象的な「戯れ」などであろう¹⁰。
- 「歴史の作用」(71)：本書で「歴史の作用」や「歴史作用」と訳されている術語は **travail de l'histoire** であるが、これは『真理と方法』のドイツ語原文における **Wirkungsgeschichte** (影響作用史ないしは作用史) の訳として用いられている。**Wirkungsgeschichte** はもともと、ある作品が後代に及ぼした影響の歴史であり、その作品を研究するさいに作品そのものに向かうだけでなく、その作品の影響作用を調べるという研究手法などに用いられる。ガダマーはこの影響作用史的な在り方を歴史的な存在一般の存在様態としてとらえ、人が何かを理解する時には先行する歴史の働きの影響を受けているということを論じた。このように、もともと研究上の一手法とし

て存在していた *Wirkungsgeschichte* は、ガダマーにおいて歴史のもつ働きや影響作用という点が強調されるようになり、その意味でフランス語の *travail de l'histoire* は思い切った意識でありつつもガダマーの意図を汲んだものとなっている。しかしながら、本訳書ではフランス語の *travail de l'histoire* も、グロンダンがわざわざ強調してドイツ語で *Wirkungsgeschichte* と表記しているところも一律で「歴史の作用」と訳してしまっているために、その意味の差異が見分けられなくなっている。「歴史の作用 (*Wirkungsgeschichte*)」(71)という文字列を見ると、少なくともドイツ語を解する読者は混乱することであろう。*Wirkungsgeschichte* という表記がわざわざなされているところは「影響作用史」あるいは「作用史」と訳すべきである¹¹。

- 「ホメリア」(75)：この語は *homélie* の訳として現われている。訳注にもあるように(156)、「ホメリア」という言葉は現在ではカトリック教会で一部用いられている単語である¹²。プロテスタントにおいてはこの語は普通使われず、単純に「説教」と訳されるのみである。この文脈ではドイツの敬虔主義が問題になっており、文中の行為の主体も「牧師」である以上、わざわざカトリックの用語を用いる必要はないであろう。
- 「理解されうる存在とは言語活動である」(78)：フランス語では *L'être qui peut être compris est langage*. であり、ドイツ語原文では *Sein, das verstanden werden kann, ist Sprache*. これはガダマーの哲学的解釈学を理解するにあたって非常に重要な一文である。ここで問題になるのは、本訳書で *langage* という語に「言語活動」という訳がしばしば当てられていることである(単純に「言語」と訳されているところもあり、揺れがある。78,9 等)。このような訳語の選定はおそらくソシュールのラングとランゲージュの区別などからの影響であろうと思われるが、ガダマーの *Sprache* にその文脈を読み込むことはできない。むしろ *Sprache* を「言語活動」と訳してしまうことで、ガダマーの意図とは正反対の帰結を生んでしまう可能性もある。ガダマーにおける言語とは人間が世界を理解するために主体的に操り用いる道具ではなく、それによって初めて世界が開かれ、存在者の存在が理解される場である。すなわち、人間が「言語」を用いる「活動」とは別の点にガダマーの強調点がある。このような誤解を避けるためにも、*Sprache* の訳語としての *langage* は、そのまま「言語」と訳されるべきであろう¹³。

このように、ガダマーにかんする第五章だけでも問題のある訳が多く見いだされる。そして、これに類する問題は第五章だけではなく、本書の全体に見受けられる。しかしながら、その

ような問題のほとんどはいわゆる通常の誤訳というわけではなく、すでに存在している訳業を参照していなかったり(「真実と方法」「解釈学的円環」)、もとのドイツ語の文脈に遡らずにグロンダンのフランス語をそのまま訳出してしまったりすること(「ゲーム」「ホメリア」)によって生じた、単なる確認不足といったものである。今回の件は、たとえ言語に知悉していたとしても、その内容にも精通していないかぎり専門書の翻訳は困難であるという一つの教訓を改めて思い起す出来事といえる(もちろん書評者にとっても自戒的に)。

しかしながら本書は、読者が全員その道のエキスパートである専門書ではなく、初心者がはじめてその分野に触れる際に手に取る入門書であるという点に、その致命的な問題がある。冒頭にも記したとおり、本書は麻生建の『解釈学』以来といってもよい入門書であり、大学の講義などで教科書として使用されることも十分想定される。そのような標準的なテキストがこのような質において提供されているということは、学術の発展上問題であると言わざるを得ない。よって書評者は、専門家を交えて本書の訳を全面的に点検したうえで改版を行うことを強く提案する。そのようにして改善された本書が、今後解釈学の研究を志す初学者の基幹テキストになることを望むものである。

最後に、これは翻訳ではなく理解の問題であるが、本訳書のカバー裏表紙にある紹介文について一言しておきたい。そこには以下のように述べられている。

神学、法学、文献学など諸々のテキストを正しく解釈する技であった解釈学は、ディルタイ、ニーチェ、ハイデガーによって解釈の普遍哲学となる。やがてガダマーとリクールの思想において著しい発展を遂げ、大きな一貫性と影響力を備えるに至った。本書は、解釈学の起源、大著作家たち、彼らの論争、また解釈の普遍性という意味をも検討する。

短い簡潔な解説であるが、ここにも本書の主張にとって適切ではない箇所がある。それはすなわち、解釈学の歴史における一里塚として、他の思想家を押しつけてニーチェの名前がここに入ってきている点である。もちろん、本書でグロンダンはニーチェにかんする説明に少しばかりではあるが頁を割いている(14, 36 等)。しかし本書の記述からも分かるように、グロンダンはニーチェを解釈学にとっての「匿名の代父」としてしか位置づけていない。「匿名の、というのも彼は解釈学というものをさほど論じなかったのだから」(14)。ニーチェを解釈学の歴史に組み込むことに対して、グロンダンは実はわざわざ論文を発表してまで抵抗しているのであるが¹⁴、その背景にはニーチェのパースペクティヴィズム的な解釈論を援

用してニヒリズム的・ポストモダン的な解釈学を論ずるヴァッティモに対して彼が精力的な反論を続けているという事情がある。しかしこのような解釈学研究の内部事情を知らずとも、単純に本書で扱われている分量からいっても、ここで挙げられるべき名前はニーチェではなくシュライアマハーであろう¹⁵。解釈学の歴史において、ガダマーの前に重要な思想家を三人挙げよと問われれば、考慮に値する例外を除いて¹⁶、ほとんどの人はシュライアマハー、ディルタイ、ハイデガーの名を挙げる。それは本書が示しているように教科書的な常識といってもいい。たしかに、シュライアマハーの名は日本の読者にはなじみがなく、書物購入のきっかけとなるカバー裏の紹介文としては、ニーチェという圧倒的な知名度が必要だったのかもしれない。しかし、まさにそのような学問状況を啓蒙するのが本書のような入門の役割ではないだろうか。

¹ 代表的なものとしては、ガダマーの伝記 Jean Grondin, *Hans-Georg Gadamer: Eine Biographie*, Mohr Siebeck, 2013 (1999)やガダマーにおける真理概念の研究 Jean Grondin, *Hermeneutische Wahrheit? Zum Wahrheitsbegriff Hans-Georg Gadamer*, Beltz Athenäum Verlag, Weinheim, 1994.などがある。

² Jean Grondin, *Einführung in die philosophische Hermeneutik*, Wissenschaftliche Buchgesellschaft: Darmstadt, 1991.

³ 麻生建『解釈学』世界書院、1985年

⁴ 以下、本訳書からの引用は括弧で括り本文中に記す。また、グロンダンが自らの解釈学的形而上学(あるいは形而上学的解釈学)において *adaequatio* の思想を展開していることにかんしては、以下の著書を参照。Jean Grondin, *Du sens des choses: L'idée de la métaphysique*, PUF, 2013.

⁵ グロンダンのヴァッティモとローティに対する批判は、以下の諸論文も参照。ガダマーをポストモダンの文脈へと組み込もうとするヴァッティモに対する批判は Jean Grondin, "Vattimo's Latinization of Hermeneutics : Why Did Gadamer Resist Postmodernism" in Santiago Zabala (ed.) *Weakening Philosophy : Essays in Honour of Gianni Vattimo*, McGill-Queen's University Press, pp.203-216. ヴァッティモによるニヒリズム的な解釈学の帰結に対して、正反対な形而上学的な帰結をひき出そうとする試みについては Jean Grondin, "Nihilistic or Metaphysical Consequences of Hermeneutics?", Jeff Malpas and Santiago Zabala (eds.), *Consequences of Hermeneutics: 50 Years After Gadamer's Truth and Method*, Northwestern University Press, 2010, pp.190-201.を参照。

⁶ Jean Grondin, *L'herméneutique*, PUF, 2011³ (2006), p.49.

⁷ ハンス=ゲオルク・ガダマー(著)、饒田収、麻生建、三島憲一、北川東子、我田広之、大石紀一郎(訳)『真理と方法Ⅰ』法政大学出版局、1986年、12頁。

⁸ 『真理と方法Ⅰ』12頁。

⁹ 『真理と方法Ⅰ』148頁

¹⁰ 『真理と方法Ⅰ』148頁

¹¹ 邦訳は「作用史」の訳をあてている。ハンス=ゲオルク・ガダマー(著)、饒田収、巻田悦郎(訳)『真理と方法Ⅱ』法政大学出版局、2008年、470頁

¹² 「狭義の説教(ホミリア)は、キリスト教の典礼行為の一つで、聖書朗読のあと神の言葉を信者の現実の生活に当てはめて説明することを指す」(『新カトリック事典 第三巻』研究

社、2002, 795 頁)

¹³ 邦訳でも「言語」の訳があてられている。ハンス=ゲオルク・ガダマー(著)、轡田収、三浦國泰、巻田悦郎(訳)『真理と方法 III』法政大学出版局 2012 年、812 頁

¹⁴ Jean Grondin, Must Nietzsche be Incorporated into Hermeneutics?: Some Reasons for a little Resistance, in *Iris*, vol.2, 2010, pp.105-122.

¹⁵ Schleiermacher の日本語表記は「シュライエルマッヘル」「シュライエルマッハー」などさまざまなものが今まで用いられてきたが、日本シュライアマハー協会はこれを「シュライアマハー」で統一しようとしている。理由などにかんする詳細は以下のウェブサイトを参照。<http://www.baika.ac.jp/~sgjapan/schleiermacher.html> (2019 年 3 月 14 日最終アクセス)

¹⁶ 例えば、客観的解釈学の系譜を重視する安酸敏眞にとっては、ハイデガーを起点とする存在論的転回は解釈学にとってのある種の逸脱であり、ハイデガーの代わりにアウグスト・ベークやエルンスト・トレルチの名前が入ってくることは考えられる。しかしながら、いずれにせよそこにはニーチェの入り込む余地はない。安酸敏眞『歴史と解釈学：ベルリン精神の系譜学』知泉書館、2012 年